

演劇脚本
前太平記擬玉殿
聖世德大赦恩典
實錄忠臣藏
版權所有
興行權

合卷一册



088630-000-3

特52-571

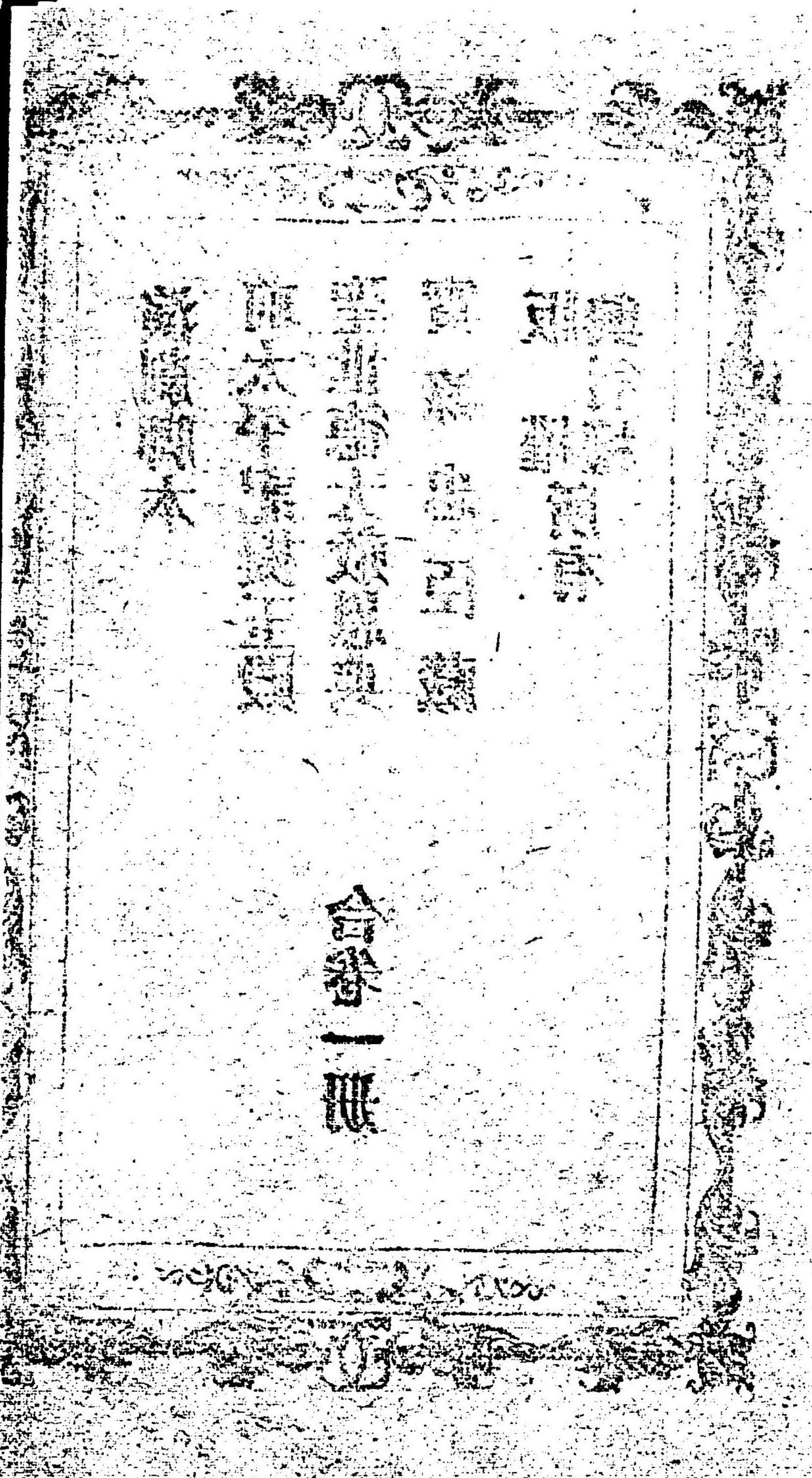
前太平記擬玉殿・聖世德大赦恩典・實錄忠臣藏

竹柴 金作/著

M23

DBJ-0289





前太平記擬玉殿

大詰

下總相馬内裏の場
同嶋廣山合戦の場

- 一 瀧口小次郎將門
- 一 武藏權頭 興世
- 一 田原藤太 秀郷
- 一 上平太 貞盛
- 一 忠臣笠間 大助
- 一 別當多治 經明
- 一 御厨三郎 將頼
- 一 大菅原四郎將平
- 一 相摸之助 將文
- 一 伊豆守 將武
- 一 下総守 將爲

- 一 常陸 八郎將則
- 一 武藏 五郎貞世
- 一 將門の臣 六人
- 一 軍兵 惣出
- 一 白拍子 春菊
- 一 實の侍女桔梗
- 一 官女 六人

竹本連中

本舞臺上段の間の新内表一面に御簾を卸し前に冠装束の偽公家六人居並び幕明久

ト昔々公家に成つたが窮屈な物で詞遣ひ迄更めねばならぬ矢張我々の武家で居る方が勝手だト話して居る後ろの御簾を巻上る真中に相馬將門冠装束にて住居左右に官女大勢附随ひ居る向ふより妻者の侍一人出て田原秀郷參内と知らせる是より詔の鳴物にて向ふより秀郷出て來り花道に平伏する(將)秀郷に二度の參着近頃太義に思ふぞ(秀)コハおふけあき詔り變らせ給ひぬ麗いしき龍顔を拜し奉秀郷身に取如何斗りか祝着至極に存奉升る(將)そこの手速じや近ふト秀郷舞臺へ來り宜敷く住ふ(將)シテ何等の義にて參りしぞ(秀)先日預り奉る千種が義に付き御詔に參内致してムリ升る(將)シテ彼の如何せしぞ(秀)御隨身の手柄始何卒千種を説諭し君のお傍へ差出さんとわれより自國へ連歸り七日が間手を盡し詞を盡し諭し升ても何分彼が片意地にて貞盛へ操を立得心を致さぬのみか眞の仇を君を罵り憎き女に候へバ餘義なく彼の首を討申願の爲持參なし參内してムリ升る(將)シテ其首級ハ(秀)尋き君の御前への恐れ多しと心得升て持參の者をお次へ待せ是へ出升てムリ升る(將)其遠慮神妙乍ら彼めが首級を見ぬ内の我も思ひを斷難し持參の者を是へと申せ(秀)其義に就て拜謁を願ひ度く存升るの豫て家來を都へ遣ひし彼地に名ある白拍子を撰みて俄に召抱へ敷慮を慰め奉らんと引連參内仕れば千種の首級御實験の後玉座を清むる男舞ひを何卒御所望遊ばし升る様願ひしく存升る(將)能くど心を用ひしを願に任せ目見得を許せば早々は

へト是より秀郷向ふへ迎ひ白拍子を呼出せ向ふ侍女桔梗白拍子春菊と偽り金烏帽子水干附太刀にて首桶を抱へ出て來る偽公家六人此姿を見て美麗と譽る秀郷件の首桶を請取千種姫の首級を將門へ實験に備へる事宜しく(將)紛ふべうなき千種が首級彼の憎くさやつ乍ら秀郷が忠義にめで首級の其儘返し遣ひそよしなに葬り得させし(秀)御許しなれば何れへか葬りやるでムリ升せう不淨を清むる男舞ひをイヤト早くト是より下座の唄に成り春菊男舞ひを舞ふ事在て偽公家六人譽る將門心に叶ひし思入にて(將)シテ彼が名の(秀)春菊と申升る(將)與へ參つて九献を開き褒美の盃遣ひさん春菊共に秀郷も今宵の數献を過しくりやれ(秀)御詔忝く候へと臣は是なる千種の首級葬り遣り度存升れば是にて御暇賜りたし願ふの君の御傍へ召れ此春菊のお執立を(將)然らぬ此儘春菊を入内させても苦しむないか(秀)君の寵を承り度き彼が望にムリ升れば冥加至極にムリ升る(將)秀郷への褒美に關白興世に申附け追て更め沙汰に及ん其餘ハ一統與へ參れ(秀)君にも益々敷慮を安んじ(將)汝も無事に歸國致せト管弦に成り將門先に官女大勢春菊を連與へ道入る偽公家六人も上手へ運入る跡に秀郷思入在て件の首桶を持花道の方へ行掛る此時上手の襖を明け權の頭興世冠裝束にて出て(興)アイヤ秀郷殿暫らくお待やれ(秀)關白殿にも疾よりして御參内にておわせしか(興)いにも疾より參内致し委細の次に承知せしが此程預り歸られし千種が得心致さぬ故首級をわけて敷覽に備へ君の逆鱗宥めんと美女を代りに差上られ首尾充分のお暇

の弓矢の道に暗からぬ外は秀でしか執持興世殆ど感心致した(秀)假令餘人の誹謗なると共君へ諂ひ身の出世を望むが則當世武士是にて御免を蒙らんと秀郷能と卑怯な事を云て向ふへ遣入る跡へ上手より偽將門六人出て(偽)飽迄諂ふ田原秀郷あの様子で此程の世の風説の偽りにて貞盛杯と合鉢なし敵對ふ所存のないと見ゆる(興)併し今日素往知れざる女を君へ捧げし油断ならざる今宵のお伽御連枝方と此興世申談せる義もムれば興へ参つて密々に(六人)然らば興にて興世卿(興)わが密意をお明し申さんト管弦にて道具廻る

本舞臺衣装部屋の道具上手に衣装葛籠へ錠をおろせしを置き笠間大助衣裝附の姿にて住居前に肴を並べ官女二人酒を進め酌をして居る舞の調への鳴物にて道具留る

(官女)サアくお上から下さる御酒故澤山頂戴なされ升せ(大)つい美しいこなた衆の進め上手に數献を過し大きに酩酊致し升たト爰へ下手の醜を明け多治經明烏帽子裝束にて太刀を持出て來りト密々此者に問ふ事あれの遠慮致せ(官女二人)ハット下手へ遣入る(大)アお尋ねの義の(經)外でもないが其方の何れの者だ(大)へい都に近い大原在の百姓の俵でムり升る(經)アノ爰な偽り者めが詞の國の手形とて汝の詞の常陸で在らう有体に申て仕舞へ(大)實の常陸の土浦在の百姓でムり升(經)然らば女も都の者と在の矢張偽りならん(大)イエくあの春菊殿の都の白柏子に相違ムり升せん(經)何にもせようさんなるの錠をおろせしあの葛籠中なる品を出して見せる(大)イエあの衣装の春菊殿が大事にかける錦物籠が

なければ錠を明け出し升舞に成升せぬ(經)ヤア錠がない迎われしきの錠の明かざる事やあらんと留ると振拂ひ葛籠の傍へ行き太刀を抜て及を葛籠へ突込み手ごたへなき故及を引抜き(經)是で詞の常陸帯都錦と偽りし己れの科の許してくれんと太刀を鞘へ納め下手へ遣入る跡見送りて大助懐中より錠を出し錠を明け葛籠を明ける内より貞盛鎧形りにて太刀を持出る(大)お身にお怪我のなかりしか(貞)只今葛籠の上よりして及通ると思ひしがわが身体にの聊さのらさ誠にも思儀な事共じや(大)扱の御武運守らせ給ふ神の加護にてあつたるか(貞)いかにも汝が申如く着せし鎧の都にて拜領なせし唐草絨し不動尊より授りし御鎧と信仰なせば神の冥助に疑ひなし(大)其御奇瑞を見る上の此虚を過さず將門めを(貞)大助ぬかるな(大)心得升たト兩人身支度をする事よろしく此道具廻る

本舞臺五間通し中足の二重前面ヲ一面に御簾を卸し灯影寫り居る床の三重にて留るト是れより床の淨瑠璃に成り文句の留り向ふより以前の貞盛大助走り出て來り花道にて(大)あれなる御簾へ灯火の寫るの正しく寐殿ならん(貞)今ど本望いとおれ大助ト兩人舞臺へ來る此時御簾の内の灯火一時に消ゆる(大)内への様子をけりしか一度に吹消せ灯の影(貞)闇に紛れて遊んでやわかめく遊さんやト兩人にて御簾を引ちぎる内に以前の偽將門六人と權の頭興世何れも同じ拵よて太刀を持立ち懸り居て(興)ヤアくわんたいなる及向ひ立ア何れが誠の將門なるか夫にて目利致して見よト是にて貞盛大助のどれが將門かわからぬ

思入七人の是を見て笑ふ爰へ上手より以前の春菊男舞ひの太刀を持出て来り(春)若殿様に
 こやつらの手立テにお乗り遊ばすな是なるの偽者にて誠の主たる將門の秀郷様の軍略を
 早くも悟り裏手より嶋廣山の要害へ立退升てムリ升る(貞)扱の將門危ふきを早くも知つて
 立退むか(大)偽將門と名のりしやつら本名明して勝負なせト是より七人の偽將門名々に本
 名と名乗り太刀を抜き切て懸る貞盛大助是と立廻り春菊も太刀を抜き此中へからみ皆々引
 ばりの見得にて知らせに付一面に黒幕を振り冠せるとんちやん遠寄せの鳴物にてツナギ道
 具出来次第に黒幕を切て落と

本舞帯らしろ山幕上下杉林都而嶋廣山麓の体爰も武藏五郎貞世ちぎれ鎧大わらひにて太刀
 を持裏切の勇士六人と立廻り居る此見得山おろし烈しき鳴物にて道具納る

(五)味方の者迄變心なし敵對ふ上の是迄なり武藏五郎が一世の働き今宵を暗れの討死なせ
 ば冥途の魁仕れ(勇)猛威に恐れ是迄の是非なく旗下に隨へど天に背きし將門杯にいづ迄隨
 ひおられんや秀郷殿の軍配にて不意の夜討に味方の狼敗其虚に乗つて裏切なし謝罪を乞ひ
 ん我々共興世の悴武藏五郎討て後日の手柄になさん(五)アヤ一旦味方に屬しながら顔色を
 見て裏切なす恥辱を知らぬ二股武士誠の武士の太刀風に又向ふなどとい小じやくな奴ト是
 より立廻りあつて勇士六人廻る追かけ貞世上手へ這入る是より大陸摩に成り「夫天地の開
 けしより例し少なき大逆も短き榮花忽ちに夢と覺行く猿鳴の内裏も兵火に焼失ひ頼む味方

も裏切と聞く將門の阿修羅の如く荒れ立つ駒にあをりをかけ群がる敵を討ちやます凡人な
 らぬ勇猛の恐ろしくも又勇々しけれト此留り荒れの鳴物に成り山幕を切て落と

本舞臺うしろ奥深に山又山を見たる切出しの遠見所々に杉の立木わり爰に以前の將門鎧の
 上へ裝束の露を絞りて着ッし附太刀大わらひにて冠りをつけ筋鉄の入りし捧を持馬上にて
 軍兵大勢を打拂ひ居る見得にて道具納るト軍兵皆々逃て這入る

(將)云ひ甲斐なき奴原の不覺よりして今宵の落城一身の外味方なく自から討つて出し上の
 日本國が一ツに成り我に敵對なるとても只一戦に蹴ちらかし猛威の働らき見せてくれんト
 將門花道の方へ行ふととる向ふより以前の武藏五郎手負ひに成り出て来り(五)夫にお渡
 り遊ばせの我君にてましまさか(將)汝の武藏貞世ならせや見れば深手を負ふたる様子シテ
 く父の如何せしや(五)ハッ落失たるや討れしや權の頭にの行衛しれせ其餘の御連枝御家
 門方の不意を討れて大半討死拙者も生年十九歳を一期となして我君の御先供を仕れば御覺
 悟わつて然るべし(將)ヤア覺悟杯どの不吉千万味方殘らせ討死なせ共いかで最期をとぐべ
 きや都へ登り敵を蹴ちらし望みを果せもまたく内汝の深手を負ひしどわらば圍みを切抜
 け活延のり父權の頭が有所を尋ね跡より都へ走せ登れ(五)イヤ御仁愛の御謔なれ共所詮活
 べき此身ならねば是にてお暇仕るト及を咽へ突込み落入る將門是を見やり思入在て氣をか
 へ(將)貞世が最期に我迄が不覺の泪忌のし、イヤ敵をば討ちやまし貞世が靈魂慰めくれ

八
 んト此時上手と向ふの揚幕の内にて(秀)ヤア〜將門暫らく待テ逆意の棟梁討取らんト田
 原秀郷是にあり(貞)父の怨敵將門へ恨の一矢參らせんと平の貞盛向ふたりト聲する(將)望
 ひ所の秀郷貞盛何れに居るか討取くれんと屹度成る此時矢飛來ッて將門の米嘴へ立膝馬し
 て起上るを木の頭にて 幕

聖世徳大救恩典

序 幕

小梅 小倉 庵の場
 切 殺 シの場

- | | | | | |
|---|--------|---|------|----|
| 一 | 小倉庵長次郎 | 一 | 青木の妾 | お辰 |
| 一 | 青木 彌太郎 | 一 | 小倉庵の | お花 |
| 一 | 野口手代榮助 | 一 | 同 | お竹 |
| 一 | 勝田 次郎 | 一 | 同 | お友 |
| 一 | 料理人三之助 | | | |
| 一 | 八百屋鉄五郎 | | | |
| 一 | お辰母おくら | | | |
| 一 | 丁稚 吉松 | | | |

本舞臺一面の平舞臺正面家根付の入口門小倉庵の額を掛け上下忍び返しのある檜羽目きつと上手に黒塗の土藏此前に用水桶入口の奥庭に不動堂杯画心に見せ都て小梅小倉庵入口の体爰に眞土勝田次郎下女二人庭下駄にて向ふを見て居る流行唄にて幕明久

(女)津田さまの誰かお待兼の様子ですが大方お樂しみ筋でムリ升う(次郎)イヤ奥に居る青木氏の思ひ者じゃが大分手間の取れる事じゃ(女)なんならお迎に行て参り升う(次)程なく参るで有うから奥へ往て相待うト三人門内へ道入る流行唄に成り向ふトお辰妾の拵へにて老母おくら野口の手代榮助丁稚吉松連立て出て來り(榮助)コレ賑又此頃に出直と仕やう今日主人の掛先故寄道をして居られぬ(お辰)折角お目に掛けて別れるのもはぬない故お手間の取らせ升んから一寸向ふの小倉庵迄來て下さい(おくら)是が桐屋に居た時御最負に成つたお禮も申たければト進めて皆々舞臺へ來る以前の下女出て(女)あなた方青木さんのお連じやアムいませんか(辰)イヤ、エそうじゃない此四人運故ひつそりした座敷へ案内しておくれ(くら)サア榮さんお道入んなさい(榮)私の跡から行くから先へ道入るかい(辰)そんなら直ぐにお出成さいよトお辰おくら下女案内して奥へ道入る跡榮助の掛先の用を吉松に言付け汁粉を奢てやるから人に言ふなト口止メとる吉松向ふへ道入る(榮)仲間の者の附合で馴染を重ねし桐屋の賑廓を出で、妾も替り計らせ出逢て爰迄來たが小倉庵で散財も少と餘慶に掛る日へト爰に門内々下女お花出て榮助を見て(お花)おまへは兄さん(榮)う

なたの妹どうして爰へ(花)此春から此内へ奉公來て居升(榮)そうして石原の親父さまの相替らせお連者か(花)此中内へ尋た時風を引て躰て、有たが忙がしいので見舞にも行れぬ故案じられて成升ぬ(榮)夫の困た者だ己も見舞に寄ると仕やうト入口より以前のおくら庭下駄にて出來り(くら)榮さん娘が待て居升から早くお出なさいト手を引張る(花)兄さん此お方の(榮)此お袋の私が馴染のイヤ何いのも仕事を頼む人だ(花)どうやらおかしな(榮)エ、(くら)サアお出成さいと榮助を連れて入口へ道入るお花案じるこなしにて(花)今方お出の女中さんとお連の様だが堅い様でも思案の外もしや御主人のお金でも遣ひ込ねばよいがナアト思入門内々三之助料理人の拵へにて出て(三之助)お花さん爰に居たか(花)お前の三さん私の奥へト行うとを留めて(三)マア待ねへコウお花どん時代な事を云ふ様だがお前が爰へ來た時からぞつととる程惚れ込んで間がな隙がな口説ても勿付る斗りでなく内の隠居に義理を立て未だにうんと言ひねへが少たア己が心を察し聞て呉てもい、ヒヤアねへか(花)イヤ、エ何と言ひしやんしても御隠居といふ主ある花お前の自由にや成升ぬ(三)何ぞといふと隠居を權に斷るのが癪に障る藥罐頭の隠居より此料理人のつゆ加減味の宜いのを食て見ねへ(花)エ、其様な事知らぬ日ナアト振拂て往かけるを捕へるお花の突退けて奥へ道入る三之助のいさゝしきこなし此以前より八百屋鉄五郎半天着流しにて長芋の苞を持ち橋懸りより出で伺ひ居て此時前へ出て(鉄五郎)三どん又はヒかれしたナ(三)手めへ

に見られちやア面目ねへがあのあまつちよも物好きな隠居に己を見替るたア餘ッ程目先の見へねへやつだ(鉄)そこがお前の自惚だ成程お前も男のいゝが是と同じ事だト長芋の苞を出と(三)何だお平の長芋だといふのかエ、手前までが馬鹿にするなへト苞を投出と鉄五郎の笑て居る此模様流行唄にて道具廻る

本舞臺二間中足の二重柿葺の本庇石の沓脱正面茶壁其他床の間戸棚違ひ棚手水桶飛石石燈籠の好み宜しく都て小倉庵座敷の体爰に以前の榮助お辰おくら三人酒を呑み居る流行唄にて道具留る

(くら)日頃娘がお慕ひ申したあなたにお目に掛たので娘もそんなに嬉しひか知れ升ん(辰)是も観音さまの御利益ゆにお禮参りを致し升ふ(榮)然しこなたも廓を出て素人に成たので私も共に嬉ふ(辰)夫も本の義理づめで據なく請出されいやな所に辛抱して塞で斗り居升の(榮)然し大金を出して請出した恩人を袖にして成升ぬ(辰)そう思つて辛抱のして居升が同じ事ならあなたの様な優しいお方と一所に成たいと夫斗りが此身の願ひ(榮)おだてゝも奢らぬからマア一ツ呑むがいゝトお辰一口呑で(辰)おつかアお爛がぬるいじやアないか(くら)そんなら私が取替て来ようト徳利を持っておくら奥へ這入るお辰榮助の傍へ寄り(辰)モン榮さん久し振りだねへト浮た合方に成り(榮)そうしてそなたの廓を出て今いどふ云ふ身分で居るのだ(辰)サア今も云ふ通り心に染まぬ様なお客に身請をされて其人の世話

に成てゝ居るもの、朝け暮お前の事斗り思ひぬ日とてムんせぬ(榮)ううした身分で居る者をこうして差向ひで酒杯を呑で居るのも濟ない事わしが事の諦めて旦那を大切にするがいゝ(辰)人の何と云ふか知らねとお前に逢たが幸ひ故どこへでも運で逃て下さんせ(榮)イヤ夫のわるい丁簡二人共に親のある身でそんな事成升ぬ(辰)そんなら私イヤ死ぬ斗り(榮)其様な事い云ひぬ者だとお辰よろしく泣伏を此以前より青木彌太郎勝田次郎後るに伺ひ居り此時前へ出で、彌太郎不義者め動き居るナト榮助お辰悔りして(辰)ヤあなたい旦那(榮)そんなら是がエ、ト逃に掛るを押へ(彌)大金出して身受せし女不義を致し憎き奴等いでや手討に致てくれん(榮)モシ、夫の大きな違ひ猿らな事などの致しませぬ(次)黙れ町人何と申張う共主ある花と差向ひで酒呑み居たるが儲かな証據イヤ青木氏(彌)此世の暇取して呉うト刀を抜く榮助悔りして引ばづし逃て橋掛へ這入る跡皆々こなし有て(辰)旦那旨く往きましたねへ(彌)イヤ馬鹿な奴もあるものだト爰へ奥より以前のおくら出て(くら)さつき花を出さうと云たをお爲でかきに押し止めて紙入の巻上て置たト出し皆々に改めて居る爰へ奥より以前の三之助鉄五郎出て共に金を分る此件にて道具廻る

本舞臺又元の入口に戻る爰に以前の吉松下女立掛り居る流行唄にて道具留る
(吉)とうに歸つた杯と己らに汗粉を食せまいと思てそんな嘘をつかないでも番頭さんに逢せてくれ(女)イエ、嘘でない何だか知らぬが下駄もはかずに周章てゝお歸りに成まし

た(吉)そんなら一應見せてくれト兩人入口へ遣入る跡以前の彌太郎次郎お辰おくら酒に酔
 してなして下女二人送て出て来る吉松も出てお辰とかくらを見て(吉)番頭さんいせうし
 ました(くら)エ、そんな者を知るものかト皆くわやく云ひ乍ら向ふへ遣入る(吉)是
 りやア餘ッ程變テコだが夫じやア汁粉を食ひそくなつたか知らんと考へながら向ふへ遣入
 る跡より以前の榮助着流し素足にて出て来り(榮)今歸つて行た様子で何でも馴合に相違
 はないが御主人の金二十八兩と書附類と入た紙入浚つて行れての言辭がない是やどうした
 ら良ろうト心配の思入以前のお花榮助の羽織と下駄を持出て来り(花)兄さんそんな者に引
 掛らしやんした(榮)面目ない事ながら大事な紙入を取られたので御主人へ申譯がない(花)
 夫の私しが御隠居に頼んで金の借て上るから石原の内に往て待て居て下さんせ(榮)そんな
 ら私も共々お願申さう(花)イエ、實の愛の今の旦那もブルだから滅多な事云のれない
 (榮)そんなら内に待て居るぞよト榮助向ふへ遣入るお花思入下女出て(女)お花さんのお父
 さんが大病と知らせて来たど手紙を出そお花見て悔りし(花)兄さんに追付て一所に行ふト
 急で向ふへ遣入る三之助出て思入有て出乃庵丁を持ち一散に追掛て遣入る小倉庵長次郎出
 て跡を見送り(長)悪事を聞たあのお花三之助に育付ての遣たもの、あいつもぞつこん惚れ
 た女旨くやつて呉れ、ばい、が、見込む流行唄にて道具廻る
 本舞臺高足の二重土手の蹴込此前浪布を敷つめ後ろ瓦杯積あり所々に藪臺都而小梅切夜

の体浪の音をかきめ流行唄にて幕明久ト

向ふよりお花出て来り(花)一足速ひで兄さんに逢いなんだト來掛る藪臺の影より三之助出
 て出乃庵丁にてお花を斬る蛙の聲水の音にて宜しく立廻りといめをさし水の中へ死骸を打
 込ひ下手より長次郎出て(長)三之助首尾能くやつたナ(三)親方大骨を折やしたト此時向ふ
 を見込み小隠れせる向ふより以前の榮助提灯を持ちお花の便りを案考て出て来るを二人出
 て提灯を叩き落せ是にて本釣鐘を打込、三人世話だんまりの摸様よろしく長次紙入を落せ、
 榮助拾ひ取りそかし見る此見得浪の音蛙の聲にてよろしく幕

實錄忠臣藏 四幕目 嵯峨山苗狩の場

一	大石内藏助長雄	一	全	夢中
一	堀部安兵衛武庸	一	全	作藏
一	清水 一角	一	全	七平
一	岩上 典藏	一	全	べく七
一	宮石 甚八	一	駕昇	四人
一	山好 文平	一	末社	惣出
一	森 勘左衛門	一	遊女	浮橋太夫
一	幫間 万八	一	遊女	浮橋太夫
一	全 千八	一	藝子	舞子仲居
一	全 めげ助	一	中二階	惣出
一	全 弁孝			

本舞臺一面常足の二重山の蹴込同じく遠見所く楓の立木都而嵯峨山秋の体爰に幫間万八立掛り是を藝子六人にて銘々苗の入り籠を提げ取圍て居る此見得騒ぎ唄にて幕明久(万八)是サわしを取巻てどうするのじや(お林)一番大な松茸を(お蝶)横取をとる万八さん(お升)早ふこつちへ(六人)返し成さんせト是より皆々にて万八へ掛り松茸を取合て居る騒ぎ宜く爰へ上手の奥より幫間めげ助出で來り此体を見て(めげ助)コレ万八どうした(万)アい、所へ來て呉た加勢をしる(林)こつちで見付た松茸を(蝶)万八さんが取た故(升)夫でみんなで(六人)取返そのじや(めげ)女の者を横取をとると仲間の面穢しめ(万)女の肩斗り持居る故何で渡そものか(めげ)うぬ斯して取るのだト兩人立廻り松茸を落と女皆々拾つて這入るト、万八脾腹を當られて目を廻と(めげ)是の大變万八ヤアイト呼活て居る爰へ又幫間夢中作藏出來り介抱し万八息を吹返し又々騒ぎながら奥へ這入る騒唄さつぱりと成り向ふより岩上典藏官石甚八山好文平森官左衛門何れも袴大小下駄掛にて酒に酔ひ出て來宜しくせりふ渡り(典藏)此嵯峨山の苗狩に天井抜のあの騒ぎ(甚八)近頃都で浮大盡と浮れて歩く赤穂浪人(文平)大石といふうつけ武士(官左)心憎き振舞故懲してやらねば相成らぬト此時上手にてツヤ／＼聲を(典)幸ひ爰へ來る様子(甚)あれへ參て突當り(文)喧嘩の手藝に(四人)致さうかト右鳴物にて四人舞臺へ來る爰へ奥より惣出の大鼓持藝子舞子仲居大勢にて手廻り酒肴の道具毛氈杯を持ち三味線を弾き大石内藏助羽織着流しにて遊女

浮橋に凭れ酒に酔ひて出て来る四人態と皆々へ突當り(四人)サア勘弁ならんぞト是にて皆々伺りして様々(一)詫入る事宜しく侍四人の是を聞かき(典)猫や狐や狸共が何疋出ても詫の聞ぬ(甚)けふ菌狩の催し主が詫れば許さぬ事もない(文)サア當人を早く出せト皆々の氣味の悪きこなし(内藏)是の各々方の御立腹無禮の段の幾重にも眞平御免下されト宜しく詫て甚失禮でいゝるがお詫の印しに一献お上り下されト是にて四人思入有て(典)詫事代りに一盞呑で(甚)機嫌を直せとあるならば迷惑ながらト宜しく毛氈を布き皆々是へ住ふ(内)然らば拙者が毒味致してト盃へ酒をつがせて呑ふとする(浮橋)ア、もしそんなに呑でいゝ身の毒わたしが助けてト盃を引取り呑干と(皆々)ヨウ(浮)是のあちらのお客さんへト四人へさそ(典)近附の爲さしたとあれば只呑む譯にも成るまい身共の熊本の藩中岩上典藏(甚)宮石甚八(文)山好文平(官)森官左衛門(典)以後の入懇にお頼み申と(内)イヤ世に在る御武家の堅いト拙者もどうか姓名でも名乗て御懇意に成たいが舊主人の名を憚りませれば只浮と申と浪人者是にてどうかお許し(典)イヤ(夫)成申さぬ客に姓名を名乗らせながら亭主が名のらぬ作法のない(甚)こりや我々を侮て取るに足らずとせらるゝか(文)嘲笑されていゝ武邊の名折れ(官)此上の九州武士が手並の程を見せて呉んと刀を持きつと成る(内)イヤ(何)も各々方を侮る譯でいゝ決してムらぬ違て御勘弁成らぬとあらばイヤ御相手と申たいが夫がいやさに此浪人名のれとあらば名乗り升うがどうぞ御他言下さるな

(典)シテ又御身の何れの浪人(甚)其姓名の何とでムる(内)實の先年切腹ありし淺野内匠頭家來にて大石内藏助と申と者(文)扱の此頃阿房浪人と評判ある大石殿か(官)名の大石でも重みがなく澤庵石にも相成まい(典)こりやか(と)をこまる輕石でムろう(甚)イヤ輕石殿(四人)ハ……ト宜しく笑ふ女形皆々腹の立つこなし(内)イヤ其通り閉口(サ)此上の酒だ(ト)是より皆々酒盛の騒ぎ宜しく爰へ下手の山影より堀部安兵衛羽織着流し大小にて出來り此体を見て(安兵衛)イヤ大石殿の其風説聞流しにさるゝ共拙者が聞捨に相成らぬト前へ出る内藏助見て(内)イヤウ珍らしや大高氏都へ登てムる事昨日一寸承たが能くぞ尋て參られた(安)サト貴殿へ密々に御相談の義がムれば一所に山科へお歸り下され(内)イヤ山科に宅のムらぬ拙者が宅の祇園町(安)スリヤ夫程迄遊女狂ひが(内)致したいから宅へ歸らぬ(安)内藏助殿エ、貴殿のサアト替た合方に成り江戸表にて貴殿の噂サ甚以て宜しからず是も何か譯ある事と所用に假托け上京なせしと批判に違ぬ此放埒アレ見よ赤穂の浪士等が頭と頼む大石の遊女狂ひに性根を乱し腐り果たる心底と口さがなき京童が口のはに掛る悔しさイヤ此上の面會なし貴殿が所存承らんとお出先迄參て見れば以の外なる此しだら是でいゝ赤穂離散の時御盟約の事も延引する等々様な貴殿でいゝ非りしが如何なる天魔が魅入しか見下げ果たる心底じやナア(内)是サ堀部赤穂離散の御盟約したとい何の體言我等とんと覺がムらぬ成程お金配分の折身の落付の相談位に及ばせ乍ら致さうと

お座成の世事の言たがまどもに受てお手前が金の無心を仕よう共そう旨く参らぬじや生中武士を立ようと思へば其身の困るの目然夫よりいつそ大小捨て金を儲け楽しい月日を送るが徳だ兎角浮世の色と酒井筒へ往て飲直し雑魚寝でもして御覽じろ堪へられた者でない御免候へたわい／＼ト浮橋の膝を枕に寝て仕舞ふ故安兵衛むつとせしこなし(典)アイヤ堀部氏とやら失禮乍ら加様な者を頼みとさるゝの御身の不覺(甚)我々の西國方の武士何も加様なうつけ者に入魂を結ぶ譯に有ねど(文)餘り見兼ねて只今も憎まれ口を聞升たが寝て仕舞ての早是迄(典)仕義に依ての我々がお力共相成うが(甚)赤穂を離散成されし折盟約有し如何なる仔細の事なるか(文)苦しからせのお聞せ成され(安)イヤ拙者迎阿房の浪人必老お辨ひ下さるなト浮橋に思入有て向ふへ這入る(万)何にしてもお伏りでの浮れて騒ぐ譯にも行かない(千)お起し申て陽氣に歸ろう(浮)モシ浮さん起成さんせ(皆々)浮様／＼ト起そ(四人)イヤろんな事での中々起まいドレ我々が起して呉うと皆々留るを退けて立掛り(典)こりや大石氏客の前で女の膝を枕に寝るとい無禮千萬(甚)是でも淺野の國家老と尊敬された武士の果か(文)性根を据へて挨拶さつせへ(官)返事が出来れば是喰へト足にてゆり起と内藏助目を覺し(内)野暮お奴が來居たのでッヒとろ／＼と思ひぬ失禮是にて眞平御免／＼ト手を付て詫る(四人)返せも／＼言甲斐ない大腰抜の犬畜生同席するも刀の穢れ是でも刀と差て居るかト内藏助の刀を抜て見てイヤ錆たりナ赤鯛是での性根が腐た筈だ(内)

夫を肴に今一献(四人)イヤ張合のないト内藏助の面に唾を吐かけて四人上手へ這入る取巻皆々悔しがるを留めて(内)又もや今の侍ひが歸て來ぬ内進ると致さう(皆々)夫が宜しふムり升ト駕屋と呼び内藏助介抱して駕へ乗せる浮橋も駕へ乗り昇上る此時内藏助一寸思入有て紙入を皆々へ知れぬ様に上手へ拔出して置き皆々騒ぎながら向ふへ這入る跡時の鐘に成り上手より清水一角羽織袴大小編笠を冠り出で、見送り居る以前の四人出て(四人)清水様(一角)コレトあたりへこなし有て編笠を取る(四人)最早御安心でムうがナ(一)イヤあれ程に耻しめられ面部に啖迄吐かけられ乍ら少しも怒りを顯さぬの聞しに優る大器量ハテ怖ろしき人物じやナア(典)イヤ夫の貴殿が力負け(甚)遊女狂ひに腸の(文)腐つた者が何として(官)望み杯のある可きや(一)イヤ／＼拙者が見込でいト此間上手の紙入を見てアレに何やらト典藏拾ひ見て(典)是ぞ彼めが喰ひ酔て落して行し懷中物(甚)中を改め見られたら底意を探る手立と成らう(一)イヤ夫迎も大石の手立ならんも測られまト浮た合方に成り四人代る／＼に色／＼讀む女郎の文書出し杯斗りある事トハ一通の手紙を出してナ／＼今晩兼て申合候連中拙宅に打寄り尊大人の御降來を待居り候(皆々)扱こそナ(一)サ、跡を早く(其)尤も何れも初心には候へ共折能く江戸の其角宗匠登り居り候間文臺を相頼み何だ是の俳諧の催しだ(一)扱の愈々全くのうつけ者で有たるかハテ目鏡違ひも有るものじやナアト此摸樣宜しく道具廻る

本舞臺都而四條河原夜の体疊んである葎茶屋柳の立木杯宜しく水の音にて道具留るト
 合方に成り上手より以前の安兵衛出て来り向ふへ思入有て柳の影へ忍ぶ賑かなる鳴物に成
 り向ふより以前の人數残らせ駕二丁と昇き出来り(駕昇)何だか肩の工合が變だト駕の垂
 を揚る中に大なる石乗て居る(皆々)ヤア〜旦那が石に成たシテ太夫さんハト一ツの駕を
 見る浮橋出て(浮)ナニ浮さんが石に成たと〜(皆々)ヤア〜何にてもお大盡を見付て
 来なければ成るまいト女形を残して皆々ワヤ〜云ひ乍ら上手へ引返す柳の影より安兵衛
 類冠にて刀を抜き持ち出て提灯を切落そ皆々悔りして人殺しト叫びながら皆々向ふへ逃て
 道入る浮橋も逃し掛るを引戻し一寸立廻りきつと見得(浮)マア〜待て盗人殿何でもお前
 に上る程に命斗りの助けて下され(安)イ、ヤ生して置れぬ譯有て命貰ふ覺悟いたせ(浮)
 そういふ聲の最前の浪人さん(安)こま言いはすとくたばり居れ(浮)アレエ人殺しト駕の廻
 りを逃廻る立廻り宜しく能き程に上手の茶店の影より以前の内藏助伺ひ出て中へ道入り扇
 子にて一寸立廻り安兵衛の刀を打落そ安兵衛取うととるを留めて態と酒に酔ひたるこなし
 にて(内)エ、イト浮橋内藏助を見て(浮)お前ハ浮さん能い所へ(安)アイヤ大石殿遊女ばい
 たに魂腐り世の物笑ひと相成る事を貴殿恥辱に思さぬか(内)イヤ耻辱とも思ひねば是から
 彼を受いだし手活の花と眺る積りじや(浮)モシ私しや怖ふてならぬ故早ふ逃て下さんせ
 (内)イヤ身が付て居れば大丈夫じや指でもさへせる事でないわサ(安)扱ひいよ〜敵の

事もトきつと成るを(内)アコレト押へるを木の頭一敵と見ねしの群れ居るかもめト話
 轟ふ安兵衛の呆れしこなし浮橋の氣味の悪きこなし此模様水の音にて 　　ひやうし 幕

明治廿三年六月五日印刷
同 十四日出版
版權興行權所有

定價八錢

著作
兼發行者

竹柴金作

淺草區馬道町二丁目十二番地

印刷者

木村隆次郎

京橋區加賀町十三番地由巳社
內

賣捌所

歌舞伎新報社

同銀座四丁目十六番地

